大東文化大学紀要44号

感情的ダイクシスについて

岩 澤 勝 彦

On Emotional Deixis

Katsuhiko Iwasawa

1．はじめに

話し手の感情を表す言語表現は多様であるが，中でも特に重要なものに直示語がある。直示語とは(1)のような表現のことをいう。[1] これらは，その外延が発話の場面との関連においてのみ了解されるという特徴をもつ。また，直示語が談話において果たす機能は，一般に，ダイクシス（直示性）と呼ばれる。

（1）I, you, we, here, there, this, that, now, then, Present, Past, come, go, bring, take, fetch

本稿では，英語の直示語が話し手の感情を表す感情的ダイクシスの事例を確認するとともに，それが直示語の用法全体の中でどのように位置づけられるのか，また，直示語が特定の感情的意味を表すことができるのはなぜか，などの問題について，主としてthisとthatの用法を中心に考察する。結論として，直示語の感情的ダイクシスの用法は，外界指示用法と文脈照応用法との中間的なものとして位置づけられること，また，特定の感情的意味合いは，＜縄張り＞と＜付託＞の概念から導かれる可能性があることが論じられる。

2．外界指示[2]，文脈照応，感情的ダイクシス

よく知られているように，直示語のthisとthatには，少なくとも外界指示用法と文脈照応用法がある。まず，前者の例から見てみよう。[3]

（2）a. <u>This</u> is my friend Charlie Brown.

b. <u>That</u> is my friend Charlie Brown. (Quirk et al. , 1985, p.375)

（3）Would you like to sit in <u>this</u> chair or in <u>that</u> one? (Leech & Svartvik, 1975, p.59)

(2)(3) の外界指示用法では，thisとthatは，まず，話し手からの空間的な近さ（近接性）に応じて使い分けられる。話し手の近くにある事物を指す場合にはthisが，そうでない場合にはthatが用いられる。人を紹介するとき，その人が話し手の隣にいるなら (2a) を用い，その人が離れたところにいるなら (2b) を用いる。(3) では，話し手の近くにある椅子をthis chairで指

示し，話し手から離れたところにある椅子を that one で指示している。

this と that の指示対象が外界の事物ではなく，テクストである場合が文脈照応用法である。これにはまず，(4) (5) に示される前方照応用法がある。(4a,b) の this/that，(5a,b) の this guy/that guy は，先行文脈に現れている斜字体の語句を指示している。

(4) a. He asked for *his brown raincoat*, insisting that this was his usual coat during the winter months.

b. I hear you disliked his latest novel. I read *his first novel*, and that was boring, too.

(Quirk et al., 1985, p.375)

(5) a. I met *a friend of yours* last night. Well, this guy told me some pretty interesting things about you.

b. Remember *the man who sold us those football tickets*? Well, that guy told me some pretty interesting things about you. (Fillmore, 1997, p.105)

また，this には後方照応的な用法もある。(6a,b) の this は，後続のコロン以下のことばを指示している。that は，(7) が示すように，通例，後方照応的には用いることができない。[4]

(6) a. He told the story like this: '*Once upon a time...*' (Quirk et al. 1985, p.375)

b. This is how you start a car: *you make sure the gears are in neutral and that the hand brake is on, then turn the ignition key.* (Leech & Svartvik, 1994, p.59)

(7) *That is what we must do: *round up the usual suspects.* (Lakoff, 1974)

this と that の使い分けは，時間的な近さによる場合もある。(8) を見てみよう。

(8) a. This is how you do it.

b. That's how you do it.

ある道具の使い方を実演・説明する場合，実演が説明と同時か直後に行われるときには，(8a) のように this が用いられ，実演・説明のあとで一言ことばを添えるときには，(8b) のように that が用いられる。前者では実演と説明が時間的に近接しているために this が選ばれ，後者では，実演・説明がすでに終わった過去のこと（したがって，心理的には離れたもの）として感じられるために，that が選ばれる。

ところで，以上の２つの用法に加えて，this/that には第３の用法があるとする立場がある。Lakoff (1974) はそれを，感情的ダイクシスと名づけている。[5] 感情的ダイクシスの this は，話し手が発話の主題に感情的に関わっていることを示すものである。当面の話題にはなっていない事柄を漠然と示したり，それを談話内にあらたに提示したりするはたらきをもつ。

(9) I see there's going to be peace in the mideast. This Henry Kissinger really is something!

(10) This Fred Snooks turns out to have 24 cats.

(11) There was this traveling salesman, and he ...

(12) He kissed her with this unbelievable passion.

これらの例において，話し手は，主題に関するなんらかの感情を表出している。たとえば (9) では，Kissingerが成し遂げたことに対する感心を表している。Kissingerのことは先行談話で導入済みであるが，それは当座の話題の焦点ではない。このような場合に用いられるthisは，話し手の感情を表出する。(10)－(12) においても，同様に，話し手が感情的に関わっていることがthisによって表される。その結果，発話に生彩さ (vividness) が生まれるとともに，聞き手との関係が感情をあらわにできる間柄であるという，仲間意識の表明ともなっている。

感情的ダイクシスとしてのthatは，Lakoffによれば，連帯感 (solidarity) や同情の念 (sympathy) をかもし出すはたらきをする。(13)－(14) がその具体例である。

(13) a. Check <u>that</u> oil?

b. <u>That</u> left front tire is pretty worn.

(14) How's <u>that</u> throat?

(13a,b) は，それぞれ，運転手と自動車修理工のことばである。ここでthatは，ふたりの間の連帯感を表している。(14) は，一度診察した患者ののどの具合を気遣う医者のことばであり，やはり，医者と患者の連帯感がかもし出される。

同様に，次の (15a) のようなthatも，話し手と聞き手が同じ意見・見解をもっていることを合図し，一種の連帯意識を表す。その証拠に，述部が中立的・客観的な内容をもつ (15b) のような場合，この用法のthatを用いることはできないとされる。[6]

(15) a. <u>That</u> Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood! (Lakoff, 1974)

b. *<u>That</u> Henry Kissinger is 5'8" tall.

以上，thisとthatには外界指示用法，文脈照応用法のほかに，話し手の感情を表す感情的ダイクシスの用法があることを見た。次節では，感情的ダイクシスが他の2つの用法とどのような関係にあるのかという問題について考えてみることにする。

3．感情的ダイクシスの位置づけ

Lakoff (1974) は，thisが話し手の感情的関与を表したり，thatが聞き手との連帯感をかもし出したりする理由について，thisとthatの外界指示用法を正しく説明できる規則によって説明されることが望ましいと述べている。また，thisは近さを意味するために感情的にも参加の意識をもたらし，他方thatは，指示対象を仲介として話し手・聞き手の間を空間的に関連づけ，同時に，両者間に心理的な関係をうちたてるとも述べている (Lakoff, 1974, p.353)。しかし，その関連づけの詳細については謎 (mysterious) であるという。そこで，以下では，感情的ダイクシスがその基本となるべき外界指示用法とどのような関係にあるのか，検討してみることにしたい。

3.1．＜縄張り＞の原理[7]

安藤 (1986) は，ダイクシスの諸現象は＜縄張り＞の原理によって統一的に説明可能であると

論じている。そして，Lakoffのいう感情的ダイクシスは存在せず，その実例として提示されている例文は，外界指示用法の例にすぎないと断定している。

安藤はまず，作業仮説として，次の(16)を仮定する。

(16) ダイクシスが指示の場に見られる現象である以上，それは言語普遍的に，話し手・聞き手の“縄張り”(territory) に関わるものとして記述しうるはずである。

その上で，直示語を，(i)話し手の縄張りの事物を指し示すもの，(ii)聞き手の縄張りの事物を指し示すもの，そして，(iii)両者の縄張りの外の事物を指し示すものの3種に分け，その使い分けが主観的な縄張りの設定によることを論証している。thisは(i)に属し，thatは(ii)(iii)の両方に属する。

例文 (17) に関する安藤の説明を見てみよう。

(17) (手元にあるものを指して) What's <u>that</u>?

この文は，たとえば賄賂などの受け取りを拒否するときの発話である。話し手の手元にあっても，自分の縄張り内のものとしては認めないという気持ちをthatによって表している。縄張りの設定は心理的に行われるものであるため，直示語には感情の含意が伴うという。

このように，Lakoffの感情的ダイクシスについて，安藤は，これが外界指示用法にほかならないと述べ，その根拠として (18) を挙げている。

(18) *I see that you lost <u>that</u> leg in the war.

cf. I see that you lost <u>your</u> leg in the war.

これはLakoff自身が挙げている例であるが，ここでは感情的ダイクシスのthatを用いることができない。理由は，安藤によれば，直示すべき指示対象legが眼前にないからである。眼前にないものを外界指示用法の直示語で指し示すことは，そもそもできない。この事実に基づいて，感情のダイクシスthis/thatは外界指示用法にほかならない，と結論する。

さらに，安藤は，(19)(20) にあげるCurme (1931) からの例文に見られるthis/thatは，一見すると快／不快，称賛／非難などの話し手の感情を表しているように見えるが，そのような心的態度を表すのはthis/thatではなく，これらが発話される際の特別な音調，および形容詞broad, inexperienced や動詞hateであるとする。

(19) a. <u>this</u> broad land of ours

b. <u>These</u> inexperienced maids are always breaking dishes.

(20) a. <u>that</u> kind wife of yours

b. I am coming to see <u>that</u> little grandson.

c. I hate <u>that</u> Johnson boy.

安藤は，これらの文のthis/thatは，快／不快の対象としての主要語を指し示すインデックスの働きをしているにすぎないと断定している。

(21)(22)の嫌悪感や不同意を表す例文は，Quirk et al. (1985, p.374) からの引用であるが，安

藤の考えに従えば，話し手の感情を表すのは，(21) ではI hope she doesn't bringの部分であり，(22) では形容詞awfulであるということになろう。

(21) Janet is coming. I hope she doesn't bring that husband of hers.

(22) She's awful, that Mabel.

以上見てきたように，安藤は，直示語が表す感情の意味は，縄張りの原理から導かれる含意に過ぎず，ダイクシスに「感情的」という特別な種類を認める必要はないと考えている。しかし，感情的ダイクシスが外界指示用法にすぎないという捉え方は，本当に正しいのであろうか。この点を次に検討してみたい。

3.2. 情報のなわ張り理論[8]と話し手の感情

感情的ダイクシスを外界指示用法の一種として説明できるなら，安藤が主張するように，文法がそれだけ簡潔になり望ましいであろう。しかし，安藤が感情を含意するとして取り上げているthis/thatは，Lakoff (1974) からの引用が含まれるにもかかわらず，いくつかの重要な点で感情的ダイクシスとは異なっている。それをここで確認しておこう。

その前に，まず，外界指示用法によって説明される感情の含意をもう一度見ておかなければならない。安藤は，this/thatがもつ感情の含意は，縄張りの概念から自動的に出てくると考えているのであるが，主たる関心がthis/thatの使い分けの原則にあるためか，直示語と感情的意味の関連について詳しくは述べていない。縄張りの概念から出てくる感情的意味については，基本的には安藤 (1986) の分析を踏襲した神尾 (1990) の説明があるので，それを見ておくことにしよう。

神尾 (1990) は，情報のなわ張り理論を論証する中で，thisとthatについて，実に明快な分析を行っている。それは，(23) のように要約される。

(23) this：話し手の縄張りに関わる

that：話し手の縄張り外に関わる

外界指示用法のthis/thatでは，話し手の指示の縄張り内にある事物はthisによって指示され，その外部にある事物はthatによって指示される。そして，英語には，聞き手の縄張りは存在しない。相手の所有物などは，話し手の縄張り内にないことからthatによって指示されるが，その場合，yourを用いた場合にはない丁寧さに欠けた感じや突き放した意味合いを伴う。したがって，たとえば (24) のような文は，まさに，その丁寧さの欠如を前面に出すことによって，相手を非難したり，一定の距離をとって客観的な立場からほめたりする意味合いを伝える。

(24) a. Oh, what a scarf that is!

b. That car, it's absolutely nice!

このように，thisとthatの対比は，心理的距離を反映する場合がある。文が表す情報が取り得る＜近＞＜遠＞という2つの心理的距離が，直示語の指し示す＜近＞＜遠＞という物理空間的な指示領域と対応しているというのである。

神尾は，服部（1968）から次の例を引いて，外界指示用法の含意する感情の意味を敷衍している。

(25) This is terrible!

(26) That is terrible!

(25)(26) の this/that は，外界指示用法である。神尾によれば，ある騒ぎが発生した場にいる話し手が，騒ぎに巻き込まれた場合には（25）を，対岸の火事のようにただ眺めている場合には（26）が用いられる。ただし，騒ぎに巻き込まれてはいなくとも，その騒ぎを見ながら「実に嘆かわしいことだ」と心から感じ，心理的に自分がその騒ぎに関与した場合には，this を用いて（25）と言うことができる。それとの対比から，（26）では，話し手がその騒ぎの傍観者であって，客観的かつ冷静な態度をとっていることが反映されているという。[9,10]

Huddleston and Pullum（2002）には，指示形容詞としての this/that にも同様の含意があるとの記述がある。たとえば上着を求めて友人と買い物に出かけているときの発話として，次の２つが考えられる。

(27) How about this one?

(28) How about that one?

自分の手近にある同じ上着についてこの２通りが可能である。（27）は，自分が買おうと思っている場合に，他方（28）は，相手に勧める場合によく用いられる形であると言う。[11]

神尾は，さらに説明を広げて，文脈指示用法の this/that にも，微妙ながら，これと並行的な意味合いが感じ取れるという。すなわち，this が用いられた（29a）においては，第１文の内容に対する賛成の気持ちが，that が用いられた（29b）においては，第１文の内容に対する中立的ないしは拒絶・却下・留保の気持ちなど，何らかの心理的距離が含意されるという。そして，これは，this が話し手の縄張りに属する情報として，that はそれに属さない情報として捉えられていることの反映であるという。（ちなみに，（29）は書きことばである。）[12]

(29) a. ...Jackson thus claims that the first theory should be preferred over the second in terms of its explanatory power. This is the view expressed by him in his celebrated 1945 article.

b. ...Jackson thus claims that the first theory should be preferred over the second in terms of its explanatory power. That is the view expressed by him in his celebrated 1945 article.

Carter et al.（2000）にも，文脈指示用法に関して同様の説明がある。それによれば，this は新しい話題を導入したり，ある話題がまだ重要であることに焦点を当てたりするために用いられるが，that はある話題がもう重要でないとして距離をおくために用いられる。

(30) Well, I had the flu. I finished up with ... that's got nothing to do with crime.

(30) では，インフルエンザにかかっていたことが当面の話題とは無関係であることを強調して

いる。ここでthisを用いると，それが重要であり，それについての話を続けようという話し手の気持ちが表される。

thisとthatによって表されるこの対比をなす話し手の感情は，次のイディオムにも反映している。

(31) This is it.

(32) That's that. That's it.

(31) は，その指示対象が重要な，十分留意すべき事柄であるという意味を表す。話もまだ続く感じがある。(32) は，あることが完全に終わって自分の手から離れたことを強調し，話を打ち切る言い回しである。

このように，thisは話し手の心理的関与を含意し，thatは話し手が指示対象から距離をとろうとしていることを含意する。これが，縄張りの概念によって説明される外界指示用法のthis/thatの基本的な含意であり，文脈指示用法の一部にも見られるものである。

このthis/thatの心的態度は，安藤によれば，間投詞としての直示語にも見られる。安藤は，ダイクシスの歴史的発達について触れ，直示語から間投詞が派生したことを指摘している。そして，日英語の直示語の体系が間投詞となった (33) (34) のような例をあげ，これらも縄張りの観点から説明できるとしている。

(33) a. コラコラ／コレコレ，何をしとるか？

b. アラ，こんな所に財布が落ちている。

(34) a. Here! What are you doing? (こら，何をしているんだ。)

b. There! I told you so! (ほら，言わないことではない。)

これらの例が含意する話し手の感情は，＜縄張り＞への出入りに伴う感情として説明される。すなわち，(33a) のコ系は，話し手の縄張りの中で何か不都合なことが行なわれたことをなじるのに用いられる。これに対して，(33b) のア系は，談話の当事者の＜縄張り＞の外のものに対して用いられ，ソトの世界から何か異質なものが侵入してきたことに対する驚きの気持ちを表す。詳細は省くが，(34a,b) についても，並行的な説明が可能であるとする。

重要なことに，安藤は，コ系には外界指示用法と，話題を直示する用法があるとし，ア系には外界指示用法しかないと述べている。話題を直示する用法が外界指示用法なのか否か不明であるが，ア系については外界指示用法しか認めていない。したがって，安藤は，間投詞の含意については，外界指示用法のそれを反映するものとして捉えていると考えられる。

3.3. 外界指示用法と話し手の意識空間

縄張りの概念によって説明される直示語の特徴は，要約すれば，thisとthatが対比を示し，意味される感情は，通例，距離をとろうとする気持ちである，ということであった。ここで，Lakoffが感情的ダイクシスとしているものに目を向けてみると，安藤とはいくつかの重要な点で

異なっていることが判明する。

まず，もっとも顕著な違いは，Lakoffが挙げている（35）（36）に見られる。

（35）That left front tire is pretty worn.

（36）A: How's that throat?

B: This/*That throat's better, thanks.

これは，安藤の例，とりわけ，（17）などで見た距離をとるためのthatとは機能が正反対である。Lakoffが感情的ダイクシスとして挙げている例は，あくまで，連帯意識（solidarity）をかもし出すものである。この点で，安藤や神尾が縄張りの概念で説明しているthatの含意とは異なる。

２つ目の違いとして，（15）に関連して触れたように，述部が中立的な場合には，このthatを用いることができないという事実がある。Lakoff（1974）の例文を再掲しよう。

（15）a. That Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood!

b. *That Henry Kissinger is 5'8" tall.

外界指示用法のthis/thatには，このような制限はない。中立的な述部をもつ文にも問題なく生じることができる。

（37）a. This does not belong to us.

b. This huge room is being remodeled.

（38）a. That got Eddie's attention and he comes back to the bedroom.

b. That man is obviously your father.

this/thatは，それ自体が感情を表すわけではないという安藤（1986）の立場では，（15b）の非文法性の説明に困ると思われる。

３つ目の違いとして，Huddleston and Pullum（2002, p.1506）の指摘がある。すなわち，感情のダイクシスのthis/thatは，外界指示用法の場合とは異なり，機能が非常に類似しており，互いに対立を示さない。この特徴は，Lakoff（1974）も指摘しているものである。

この対立の欠如という点では，感情的ダイクシスは，外界指示用法よりも，むしろ，文脈照応用法に類似している。次の例を参照されたい。

（39）#I went Christmas shopping and bought a t-shirt$_i$ and a CD$_j$; that$_i$ is for Kim, and this$_j$ is for Pat.

（39）は，文脈照応用法のthisとthatを対比的に用いようとした例であるが，その解釈が不可能であることを示している。[13]

さらに，４つ目の違いとして，外界指示用法のthis/thatは指示代名詞であり，単独で生じるが，感情のダイクシスは指示形容詞のthis/thatであり，主要語による支えを必要とする。この点でも，（40）のように後続修飾語句（*of the missing*）を必要とする文脈照応用法と類似している。

（40）Their names weren't on the list of the dead, nor on that *of the missing.*

（40）では，thatは名詞listのみを照応している。先行詞が名詞句ではなく名詞であることから

も予測できるように，このthatには外界指示的な意味はない。また，(41) に示すように，thisに置き換えることはできないので，thisとの対立も欠如している。

(41) *Their names weren't on the list of the dead, nor on this of the missing.

以上見てきたとおり，Lakoffの感情的ダイクシスは，外界指示用法のthis/thatとは，含意の性質をはじめとして，かなり異なる性質をもっていると言える。したがって，感情的ダイクシスを外界指示用法と同一視することはできないと言えよう。

感情的ダイクシスの含意が，外界指示用法の直示語がもつ含意と同じように縄張りの概念によって説明することができないとすると，それはどのように説明されるのであろうか。ここで，感情的ダイクシスの例 (42) に対して安藤と神尾が与える説明にもう一度目を向けてみよう。

(42) I met this weird guy the other day.[14]

(42) のthisについて，安藤は，「その時点で話し手の頭の中にある話題を直示する」と説明している。thisが指示形容詞でない例も追加しておこう。

(43) What's all this I hear about you and Alex getting into trouble at school?

(Huddleston & Pullum, 2002, p.1510)

また，安藤は，下に再掲する (36A) のthatについて，「過去指向的な外界指示用法」であり，話し手と聞き手の双方にとっての旧情報，すなわち "both of us know" という意味を表すという。つまり，(36A) のthatは「せきで君を苦しめていた例ののど」といった意味であると説明している。

(36) A: How's that throat?

B: This/*That throat's better, thanks.

この種のthatを，神尾は＜記憶された情報＞という概念で説明する。このthatは，文脈の外部にある記憶された情報を指すというのである。この種のthatは，話し手と聞き手の共通の経験 (shared experience) を前提とするものである。例文を追加しておこう。

(44) It gives you that great feeling of clean air and open spaces. (Quirk et al., 1985, p.375)

(45) I used to enjoy those enormous hotel breakfasts. (Gundel et al., 1991)[15]

(46) ...the Tri-State very slow, there is that overtured car at Touhy...'

(47) Gimme that old time religion.

これらの例におけるthisとthatは，発話の場にあるものを指す外界指示用法でもなければ，前出の語句を受ける文脈照応用法でもない。それにもかかわらず，話し手と聞き手は，共有する経験や知識に基づいてその指示内容を同定できる。thatはその経験・知識が過去のものである場合，thisはそれが現在のものである場合に用いられる。このような用法を，Huddleston & Pullum (2002, p.1510) は覚え用法 (recognitional use) と呼んでいる。話し手と聞き手がともに見覚え・聞き覚えのあるものを指し示しているからである。

ここで，thisは「その時点で話し手の頭の中にある情報」を指し，thatは「文脈の外部にある

記憶された情報」を指すという説明に注目したい。これは，共に，this/that が話し手の頭の中（いわば話し手の意識空間とでも呼ぶべきもの）を指していると言っているのである。感情的ダイクシスを認めるか否かという問題に照らして述べるなら，安藤と Lakoff の見解の違いは，「話し手の頭の中」を外界に含めるかどうか，という点に集約されるように思われる。「話し手の頭の中」はあくまで外界であるとするのが安藤であり，それを外界とも文脈とも異なるとするのが Lakoff である。

このように考えるなら，安藤と Lakoff の立場は，本質的に違うものではないということになろう。そして，興味深いことに，「話し手の頭の中」は，外界と文脈の中間的なものとして位置づけられる可能性がある。話し手は外界に存在しており，その頭の中に浮かんでいる想念は話し手にとっては瞭然としており，安藤の主張するように，外界指示用法の this/that で指し示すことができる。しかし，(39) で見たように，「話し手の頭の中」では this と that が対比を保持できないことにも表れているとおり，外界とまったく同じように指示し分けるほどの距離感はとれない。[16] 「話し手の頭の中」のこの中間的位置づけのために，感情的ダイクシスは，Lakoff が再三指摘しているように，外界指示用法とは異なる含意をもつと同時に，this と that が互いに類似の含意をもったり，文脈照応用法に類似した特徴を示したりすることになるのだと考えられる。

もっとも，感情的ダイクシスが外界指示と文脈照応の中間的性質をもつと考えても，それですべての問題が解決されるわけではない。とりわけ，外界指示用法では距離的なへだたりを意味する that が親密さや連帯意識の表現として用いられる点は，Lakoff も述べているように，依然として意味論的には非常に奇妙な問題として残される。縄張りの概念によっても，親密さ，連帯意識，同情の念などの意味合いは，容易には説明できないのではないかと思われる。

Lakoff（1974）は，この問題について，一つの考え方を示している。それは，外界指示の that は，指示対象を介して話し手と聞き手のつながりを確立するというものである。しかし，その詳細を，直示語の基本的用法から説明しようとする試みは，とりわけ that の場合，判然としない部分があると Lakoff は述べて，それ以上の追究を行っていない。

外界の対象を指示する表現が，単に対象を指し示すだけではなく，話し手と聞き手の間に感情的関係をうち立てるという現象は，メイナード（2000）のいう＜付託＞の概念と重なるところがあるように思われる。そこで，最後に，＜付託＞の概念について触れて，この問題についての見通しを述べておくことにしたい。

4．＜付託＞というストラテジー

＜付託＞とは，和歌において使われる手法であり，メイナード（2000, p.170）によれば，(48) のように定義される。

(48) ＜付託＞とは何かに託して感情や思いを表現することである。

その上で，メイナードは，次のように言う。

(49) …名詞句を談話の世界に投げ出すことで，主体と相手は同じ対象を見つめ，それを見つめるために，ある心情を持つ他者になってみるという心理過程が必然的に生まれる。（メイナード，2000, p.186）

たとえば，(50)の商人のことばは直示表現「この」を含み，＜付託＞的な原理によって，話し手の感情を表している。

(50) 信長：　そのかわり，おまえ奉行として雇い入れてやる。それでどうだ。
　　商人：　奉行？この私がですか？
　　信長：　いやか？　（メイナード，2000, p.288）

指示詞の this/that は，まさに，指示対象を談話の世界に投げ出すことで，話し手と聞き手に同じ対象を見つめるということを強いる。そのことによって，両者に連帯意識をもたせるという効果をもたらしているものと考えることができる。(9)や(15)に見られた意見の同調を促すという特徴も，＜付託＞と類似の原理によるものではないかと考えられる。しかし，この点に関するより詳細な検討は，今後の課題である。

5．結語

本稿では，this/that には感情的ダイクシスの用法があることを確認した。そして，生彩さや仲間意識などの含意は，話し手の意識空間を直示する用法として位置づけられるということを見た。意識空間を直示する場合，聞き手の立場からいえば，ある名詞句が談話の世界に投げ出されるということである。そこから，和歌でいう＜付託＞のストラテジーと類似の原理によって，両者の間に連帯意識がもたらされると理解できる。また，直示語が話し手の意識空間を直示する，という考え方によって，外界指示用法において見られる this と that の対立が感情的ダイクシスの用法では解消される，という一見奇妙な現象も，自然に理解されるということが論じられた。

注

1 Present は現在時制を，Past は過去時制を表す。

2「直示的（deictic)」と言った場合，直示語が外界指示の機能をもつ場合だけを限定的に意味するのか，直示語のすべての用法を総称的に指すのか，学者によって異なるために混乱が生じる可能性がある。たとえば，Lakoff（1974）は，前者の意味で deictic を用いている。本稿では，外界を指す用法だけを意味する場合は「外界指示（exophoric)」と呼び，「直示的」とは呼ばないことにする。

3 Leech & Svartvik（1994)は，これを場面的（situational）な用法と呼んでいる。

4 Quirk et al. (1985, pp.375f.) によれば，たとえば憤怒 (indignation) を表す場合など，that が後方照応的に用いられることもまれにある。その場合の that は，強勢を伴う。

(i) What do you think of THAT! Bob smashes up my car, and then expects me to pay for the repairs.

5 これは，指示形容詞としての this/that の特殊な用法として説明されることもある（大塚他（監）1982, p.300)。いわゆる喚情的意味 (affective meaning) で用いられた指示代名詞である。また，例文の口調からもわかるように，この this/that の用法は極めて口語的であり，書きことばではまれである。

6 後述するが，that が外界指示機能しかもたず，それ自体が感情を表すわけではないという安藤 (1986) の立場では，(15b) の文の容認可能性の説明に困ると思われる。

7 安藤は，＜縄張り＞をこのように漢字で表記している。本文では，安藤に従ってこの表記を使用する。

8 神尾の「なわ張り」理論は，固有名詞として定着していると考えられるため，この理論に言及する場合に限り，かな書きの「なわ張り」を用いる。

9 Huddleston and Pullum (2002) は，(i) (ii) の文について同様の説明をしている。

(i) What is <u>this</u>?

(ii) What is <u>that</u>?

話し手は，手に持っているものについて，(i) でも (ii) でも用いることができる。通常 (i) が用いられるが，(ii) は，承認したくないなどの話し手の否定的な態度を示すのに用いられる。

ところで，(25) (26) の述部は同じであるから，2 文の含意の違いは this と that に起因すると考えなければならない。したがって，this と that がインデックスに過ぎず，それ自体は感情的色彩をもたないとする安藤の考えは，再検討の余地がある。

10 this が，やや距離をとっていることを表す場合もある。Marmaridou (2000, p.114) は，this と that に承認 (acknowledging)・表出 (expressive) の用法があることを認め，認知言語学の枠組みで分析している。基本的前提として，以下のものを考える。

(i) this と that の表出的用法は，これらの語の遠近の空間的指定と矛盾しない

これは，物理的空間から感情的空間への比喩的なマッピングが考えられるはずだという前提である。この考え方では，this は近接的な態度を，that は距離をとる態度を表す。ところが，この点

を例示する次の例では，this は心理的な距離を表すという。

(ii) You can look at this face and not laugh?

この場合，that を用いるのは矛盾をきたすという。この例では，this は my との対比で用いられており，ある程度の隔たりを表すことになるという。

11 (27) (28) の this/that は，主要名詞 one を伴う指示形容詞である。指示形容詞の this/that にも，外界指示の指示代名詞と同様の含意が見られることを示す例として貴重である。

12 that の類例を Carter et al. (2000, p.88) から引用しておこう。

(i) It is, of course, impossible to analyse style. That wouldn't be stylish, would it? And anyway, what is commendably stylish in one person is offensive in another.

(ii) Lots of people don't like boxing; many would like to see it banned. But to have men decide for women that we really don't want to mess up our hair and get involved in such a nasty, aggressive business is a different issue. That's just plain sexist.

13 #は意図した照応関係の解釈が不可能であることを示す。

14 Mey (1993, p.199) によれば，Gundel et al. (1991, p.38) では，'a certain young female' の意味で用いられた (i) の this は，話し手にとってそのような情報が重要でないとか，あるいはすでにほかの方法で十分に確立されているなど，その身元についてこれ以上詳しく説明する必要のない場合に用いられるとされている。

(i) I met this girl the other day.

15 Gundel et al. (1991) は，'reminder-deixis' と名づけているようである。

16 Mey (1993, p.96) は，直示語が指示する力を失って，指示対象に対する話し手の肯定的（または否定的）評価を含意するようになっていると述べている。指示の機能と話し手の評価の含意との関係については，稿を改めなければならない。

参考文献

Curme, G. O. 1931. *Syntax.* Boston : Heath.

Carter, Ronald, Rebecca Hughes and Michael McCarthy. 2000. *Exploring Grammar in Context: Upper-Intermediate and Advanced.* Cambridge University Press.

Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures on Deixis* (CSLI Lecture Notes Number 65). CSLI Publications,

Stanford, California.

Gundel, Jeanette, Nancy Hedberg and Ron Zacharske. 1991. Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. (MS)

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge University Press.

Lakoff, Robin. 1974. Remarks on *This* and *That.* *CLS*10. *pp.*345-356.

Leech, Geoffrey and Jan Svartvik. 1975. *A Communicative Grammar of English.* London and New York: Longman.

Marmaridou, Sophia S.A. 2000. *Pragmatic Meaning and Cognition.* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Mey, Jacob L. 1993. *Pragmatics. An introduction.* Oxford: Balckwell.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店。

大塚高信・中島文雄（監）1982.『新英語学辞典』研究社。

神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』大修館書店。

服部四郎. 1968. 『英語基礎語彙の研究』三省堂。

メイナード・泉子・K. 2000.『情意の言語学』くろしお出版.

(2005年９月16日受理)